SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

二次創作/再創造としての映画：川端康成「眠れる美女」試論

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 充正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029535

二次創作／再創造としての映画
――川端康成「眠れる美女」試論――

田村　充正

川端康成「眠れる美女」という小説が昭和 36（1961）年 11 月に刊行されてからすでに半世紀をこえる時間が流れ、この間に 140 本以上の評論や論文が書かれてきた。[1] そこでは表題どおりの〈美女〉ばかりが登場するわけではないこの小説のパロディの原型として 17 世紀に書かれたシャルル・ペローの童話「眠れる森の美女」（La Belle au bois dormant）との異同が検証されたり [2]、主人公江口と同名の謡曲「江口」や「十訓抄」などの古典作品との関係性が論じられたり [3]、あるいは老人が裸体で眠る娘をほしいままにするというこの物語設定そのものを暴力やサディズムと評する論文 [4] など、今現在も様々な読解の光がこの作品にあてられ続けているのだが、国内外ですでに四度映画化されているこの小説とその映画について本格的に論じた論文としては、福田淳子「映画「眠れる美女」二作をめぐって」（『川端文学への視界 20』銀の鈴社、2005 年 6 月、のち『川端康成をめぐるアダプテーションの展開　小説・映画・オペラ』フィルム・アート社、2018 年 3 月）があるばかりのようである。

小説を原作とする映画は〈文芸映画〉と称されて、日本映画の草創期からあるのだが、いくつかの例外を除いて、名作小説がそのまま名作映画とならないことは、言語芸術と映像芸術の違いを考える契機となるのかも知れない。原作小説をその物語内容や構成に忠実に映像化しようとしても、そもそもすべての言葉が指示する映像をもっているわけではないし、指示された映像も受容者によってそれぞれ異なる。文芸映画の成功はリンダ・ハッチオンがいうように元テクストへの忠実性ではなく、むしろ元テクストをどのように解釈し、独自の芸術作品として再創造できるかにかかっているのだろう。[5]

（1）近藤裕子「「眠れる美女」研究動向」林武志編『川端康成戦後作品研究史・文献目録』教育出版センター、昭和 59 年 12 月／石川則夫「「眠れる美女」研究史」羽鳥徹哉他編『川端康成作品研究史集成』鼎書房、2020 年 9 月

（2）高橋真理「『眠れる美女』論―眠りのことなど―」「日本文学」44-9、平成 7 年 9 月

（3）平山城児「川端文学と古典の世界」（長谷川泉編著『川端康成作品研究』八木書店、昭和 44 年）／小林芳仁「『眠れる美女』と古典」『美と仏教と児童文学と―川端康成の世界―』双文社出版、昭和 60 年 12 月

（4）高良留美子「弱者へのサディズム――川端康成『眠れる美女』『美しさと哀しみと』」岡野幸江他編『売買春と日本文学』東京堂出版、平成 14 年 2 月

（5）リンダ・ハッチオン（片淵悦久他訳）『アダプテーションの理論』晃洋書房、2012 年 4 月、26 頁

さてその小説が数多く映画化されている川端康成の作品の中でも国内で二度、海外で二度映画化されている作品は「眠れる美女」をおいて他にはない。その映画化とは下記のとおりである。[6]

（１）吉村公三郎監督『眠れる美女』松竹、昭和 43（1968）年
脚本　新藤兼人　配役　田村高広（江口）、初井言栄（宿の女）、松岡きっこ（初恋の娘）
（２）横山博人監督『眠れる美女』ユーロスペース、平成 7（1995）年
脚本　石堂淑朗　配役　原田芳雄（江口由夫）、大西結花（菊子）、石堂淑朗（小林）
（３）ヴァディム・グロウナ監督『眠れる美女』ドイツ、2006 年
（原題）Das haus der schlafenden schönen　脚本・主演　ヴァディム・グロウナ
（４）ジュリア・リー監督『スリーピング・ビューティー 禁断の悦び』オーストラリア、2011 年 （原題）Sleeping　Beauty　脚本　ジュリア・リー　配役　エミリー・ブラウニング

原作小説とその映画を「何を足したか、何を削ったか、何を変えたか」[7]という忠実性の基準で分析すれば、様々なレヴェルでの差異を果てしなく記述することができるであろう。アダプテーション分析としては、当該の映画が原作小説のどのような題材に焦点をあて、これをどのように変奏して、本歌取りのように再創造された作品の芸術性の高さを批評するのが王道であると思われるが、「眠れる美女」を論じる本稿は〈試論〉として、まずは主人公江口のモノローグ性に注目したい。

なるほど「眠れる美女」は三人称小説として主人公の江口はあくまで語り手の描写対象であるが、全編を通じて江口のモノローグ（独り言）を聞く印象を論者は強くもっている。言葉とは常に誰かに向けられた言葉であり、言葉そのものの中に対話性があるとすれば、江口の心中の言葉は他者である誰かにではなく、もうひとりの自分に向けられた言葉で、その誰にも開かれることのない孤独なモノローグ性がこの小説を支配している。そしてそれは江口の目の前にいて触れることもできる裸体の娘たちが眠っていることに起因しているのではあるが、ではこの娘たちが目を覚ましていれば、江口はこの娘たちと対話し、理解しあうことができたのであろうか。過去の女たちに対してもそうだったように、誰とも真の対話をすることなく、孤独なモノローグでしかない江口の追想は、しかしコミュニケーションという行為そのものの幻想性、不能姓を語っているように思われる。

この小説の登場人物は、六十七歳になる江口由夫と四十半ばくらいの宿の女、それに江口のまえに裸身で現われる六人の〈眠れる美女〉たちである。江口にこの宿を紹介した木賀老人と、この宿で狭心症で死んだ大柄な福良老人は、地の文や江口の語りの中で言及される人物であり、頓死した福良老人を運ぶひとでとしての「下にいる男手」は宿の女の言

（6）ここに「眠れる美女」が創作の契機となった作品として 1994 年にフランスで制作されたクロード・ミレール監督『オディールの夏』（原題）Le　sourire（脚本クロード・ミレール、配役エマニュエル・セニエ）を加えることもできるのであるが、本論では扱わない。
(7)今野喜和人「はじめに」『翻訳とアダプテーションの倫理――ジャンルとメディアを越えて』春風社、2019 年 2 月、9 頁

葉の中の人物である。妻子ある江口の乳飲子の匂いを嫌ったなじみの芸者、大学を出たばかりの江口が北陸路から京都へ駆け落ちをし、その後上野の不忍池で再会した娘、眠る前に接吻をしてもいやでないと思える男を数えるという会社の重役夫人、江口の三人の娘のうち二人の若者に求婚された末娘、三年前に神戸のナイト・クラブから連れ出して関係をもった二十代の人妻、町の祭りへ行きたがった十四歳の幼い娼婦、口紅のついたハンカチをバッグにしまって接吻を否定した四十年前の娘、そして江口が十七歳の年に血を吐いて死んだ母親、これらはすべて裸体で横たわる〈眠れる美女〉たちの匂いや肌や容貌から想起された江口の過去の記憶の中の人物である。

江口が現実に相対しているのは宿の女と六人の〈眠れる美女〉なのだが、正体不明で素性のわからない宿の女は江口の質問に対してはかばかしい答えをせず、〈眠れる美女〉たちは深く眠っているがゆえに江口のかける言葉にも乱暴な行為にも対話的反応を示すことはなく、その身の上も説明されることはない。かくして江口の意識は目の前の登場人物ではなく、自らの性をめぐる過去へのモノローグとなる。この宿に通う他の老人たちのまもない死への恐怖や過去の背徳への悔恨を思ってみたところで、江口自身はそれらについてもなにか哲学的な省察や道徳的な反省を深めていくわけではない。

このような対話性のない、物語的発展のない江口のモノローグ小説に映画はどこまで耐えうるのであろうか。本稿では江口の本来の対話の相手である〈眠れる美女〉たちが国内外四本の映画でそれぞれどのように描かれているかに着目したい。

（1）吉村公三郎監督『眠れる美女』松竹、昭和 43（1968）年

1953 年に川端康成「千羽鶴」の映画化を試みたことのある吉村公三郎監督の『眠れる美女』は 1968 年 1 月に劇場公開された。ちなみにこの年の 10 月に川端康成は日本で三番目のノーベル賞受賞者に選定され、12 月にストックホルムでその受賞記念講演「美しい日本の私―その序説」をおこない、講演原稿の巻頭に引いた道元の歌を「四季の美を歌いながら、実は強く禅に通じたものでしょう。」と結んだところから、まだ世界によく知られていなかった川端文学は、1960 年代に生成したアメリカン・ハイクにおいて俳句がそう捉えられたように、日本の伝統的な禅文学という理解が広まったのだが、同年に公開されていたこの『眠れる美女』の原作者が川端康成であるとあわせて紹介されていれば、当時の海外における川端文学の理解も違ったものになっていただろう。

さてこの映画作品はモノクローム・フィルムで撮影されている。同時代の映画のほとんどがカラー映画である中で、白黒の映像は主人公江口老人の観念や過去の記憶を映像化するに適していると思われるのだが、この作品は江口のモノローグ表現を志向していない。福田論ですでに分析されているように、ここでは〈眠れる美女〉の宿での出来事と江口の妻や末娘をめぐる家族の出来事が、かつて関係をもった江口の過去の女たちとの記憶を媒介に展開される。原作小説では「三人の娘たち」とだけ言及される江口の娘は、『眠れる美女』では長女保子、次女時子、三女美子と名前が与えられ、長女は鹿児島に住んですでに五人の子をもうけ、音楽家に嫁いだ次女は夫がフランスに行っているためのり子という娘を連れてたびたび実家に顔を出している。末娘美子と、樋口と吉田という同じ会社の貿易課で机を並べる二人の結婚相手候補をめぐる〈事件〉は、樋口によるレイプの場面が具体的に映像化されたり、江口が吉田や樋口をそれぞれ料亭に呼んで意志を確認したり、叱

責したり、鶴岡八幡宮での婚礼の後に福島から上京した吉田の兄と挨拶を交わしたり、伊豆へ新婚旅行に出発する二人を駅で見送ったりして、物語は〈眠れる美女〉を前にした江口の過去へ追想というよりは、むしろ江口の家族をめぐる現実の出来事がこの映像作品では優位を占める。主人公江口も江口又造というすでに個人全集が刊行されている小説家で、三好達治や梶井基次郎と親交のあったことが言及され、その部屋には三好達治の「桃の花また梨の花人の世にわが見し夢ぞあはれなる」の色紙が飾られている。原作小説で江口が〈眠れる美女〉の宿で最後にみる幻想的な夢、新婚旅行から帰るとあるはずのない赤いダリアのような花が家をうずめるほど咲いていて、死んだはずの母が出迎えてくれるという夢も、この映画では自分たちの結婚が義母に祝福されたという江口の妻の喜ばしい記憶として描かれ、江口が十七歳の年に血を吐いて死んだ母の追想はここにはない。

このように老年期を迎えた江口の家族をめぐる出来事を主とする物語に変奏されたこの映画作品は、〈眠れる美女〉の宿で頓死した福良老人の断末魔の身もだえによってつけられた〈眠れる美女〉の胸の爪痕と学生時代の江口が駆け落ちをした娘の胸につけた爪痕という図柄の連続性によって映像を繋ぎながら、性的な関係をもった最初の男と結ばれないというテーマを末娘美子の結婚物語に上書きしてゆく。〈眠れる美女〉を前にして江口が思うのは「純潔、生娘、老人どもにもてあそばれながらもこの娘は生娘でいるのか」という問いかけで、〈眠れる美女〉たちはこの映画が撮影された 1960 年代後半の日本社会の性道徳にしばられない若い娘たちとして、江口の問いに答える姿をラスト・シーンでみせることになる。もの言わぬ〈眠れる美女〉はこの映画の最後にオートバイで浜辺を疾走する姿で再登場する。（図像①）ハンドルを握る男の背につかまって浜辺を疾走する娘（図像②）であるが、当初の案では娘自身がハンドルを握り、若い男がその腰にしがみつくという構想があったようである。[8]〈眠れる美女〉を演じた女優の水城リカが「（映画に出演して）裸になったことで両親から”勘当”された」[9] と取材に答えているのも、時代によって変化するモラルをあらわしているのだろう。

（8）（配給会社松竹により劇場公開前に関係者に配布された「眠れる美女」紹介資料■ものがたり）の結び

式を了えて、新婚夫婦は、幸せそうに旅立って行きます。

二人を見送って、江口は、夫人と別れ、海岸にやって来ました。

無人の高速道路の彼方に一点が現われたかと見ると、それはみるみる大きくなって、ものすごいスピードと爆音をあげて迫った来ました。オートバイのハンドルを握っているのは、若い女で、女の腰にしがみついているのが若い男です。それは、「眠れる美女」の家で見た第三の少女なのです。風のように、幻のように、一瞬にしてオートバイは通過して行きます。江口は、危うくよけて、少女に呼びかけようとします。しかし、すでにオートバイはぐんぐん小さくなって遙かかなたに一点となって行きました。手をあげたまま、江口は茫然と立ちつくします。

無人のハイウェイに陽炎がゆらめいています。

（9）栃木新聞（昭和 43 年 2 月 4 日）「スターハイライト　水城リカ」

①浜辺を疾走するオートバイと江口

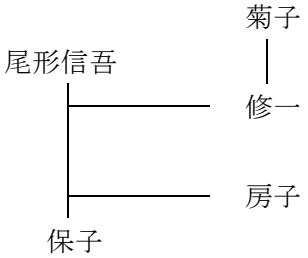
②〈眠れる美女〉の娘

（２）横山博人監督『眠れる美女』ユーロスペース、平成 7（1995）年
脚本　石堂淑朗　配役　原田芳雄（江口由夫）、大西結花（菊子）、石堂淑朗（小林）

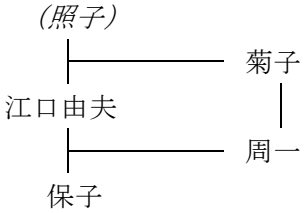
四作の映画のうちもっとも大胆な翻案をおこなっているのがこの横山博人監督版『眠れる美女』であるが、原作小説の孤独なモノローグ性からもっとも遠ざかっているのもこの作品だろう。ここには川端康成「山の音」の物語が取り込まれている。横山博人監督は「眠れる美女」の映画化を実際の制作に取り組む十年ほどまえから構想していたそうで、「とくに大好きな「山の音」と「眠れる美女」をひとつの物語にできないものか」と悩んでいたところ、吉田喜重監督『女のみづうみ』（1966 年、松竹／原作川端康成「みづうみ」）の脚本を書いた石堂淑朗氏と出会い、石堂氏の〈近親相姦〉というテーマを持ち込むというアイデアによってこの二作品を融合させることに成功したと語っている。[10]

「山の音」と横山版『眠れる美女』に取り込まれた登場人物は下記のように図示できる。

川端康成「山の音」



横山博人監督『眠れる美女』



クラシック音楽の評論家でラジオ局の DJ などもつとめる江口由夫は大学時代の悪友小林の葬儀の帰り、友人の木賀や福良から、小林は温泉宿で急死したことになっているが、実は〈眠れる美女〉の家で亡くなったことを知る。江口の妻保子は産婦人科医という設定で、別棟ながら息子周一、菊子の夫妻と一緒に暮らしている。天涯孤独の身の上の菊子は子どもを望んでいるが、夫の周一は自分の親友と浮気をしており、舅である江口に安らぎを見出し、江口もまた息子の嫁の菊子を好ましく思っている。〈眠れる美女〉の家に通い

(10) 田沼雄一「インタビュー　横山博人「物語の構築に関わる脚本家とのキャッチボール」「キネマ旬報」平成 7 年 10 月下旬号、No.1174

はじめた江口は二夜目に〈眠れる美女〉にむかって菊子と呼びかける。江口への思いを募らせる菊子はかつて芸者をしていた母照子の同僚だった〈眠れる美女〉の家の女主城所松子に頼み込み、〈眠れる美女〉となってこの秘密の宿で江口を待つ。裸で横たわる菊子に当惑する江口だが二人は関係をもち、菊子は妊娠する。しかし江口は大学病院の医師である友人の木賀から、検査の結果菊子は江口がかつて遊んだ芸者照子との間に生まれた自分の娘であることを告げられる。一方〈眠れる美女〉の宿の女主松子は友人であった照子の復讐を果たすためか、そのことを電話で菊子に伝え、その衝撃の事実から菊子は昏倒して生死の境をさまよう。だが赤ん坊はぶじに生まれ、菊子も健康を快復し、一家はお宮参りの境内で記念撮影をする、という場面で映画は終幕となる。

この映画作品で際立つのは菊子という人物の造形だろう。菊子は映画の冒頭、竹林に囲まれた高台で曰わくありげな美しい和服の女（かつて川頭義郎監督『伊豆の踊子』で踊子を演じたことのある女優鰐淵晴子）と会って話をしている。（図像③）菊子は芸者だった自分の実母照子の消息をたずねて女に手紙を書いた。実母が兼松屋という置屋にいたことまでは突き止めたのだが、すでに兼松屋は跡形もなく、隣に残っていた柊屋のお婆さんに聞いて訪ねてきたのである。女は自分たちは源氏名で呼び合っていたので、照子という本名では分からないと菊子に答える。実はこの女は城所松子という〈眠れる美女〉の宿の主で、江口が〈眠れる美女〉の宿を訪れた二夜目に、かつて照子という子と組んで座敷に出ていたと話すが、江口は覚えていない。江口は三夜目に〈眠れる美女〉となった菊子（図像④）と関係をもつのであるが、松子は江口が宿を訪れた四夜目に、照子が江口の子を妊娠したが江口に棄てられ、産後の肥立ちが悪くて死んだこと、生まれた赤子を子のいない足袋職人の夫婦に実子として預けたのだが、その夫婦も亡くなってしまい、江口が菊子の実父であり、唯一の肉親であること、そしてそのことを菊子はまだ知らないことを告げる。

目を覚ました〈眠れる美女〉が菊子であってみれば、江口は生まれてくる子をめぐって菊子と深い対話をすることになる。ホテルの一室で二人が語り合う場面、面白いのは菊子が江口の口真似をして江口の思考をなぞるような仕方噺をしてみせる。「覚悟はできている。もし秘密が保たれるなら、皆の為にも良いことだと、散々考えた。保子や周一も喜ぶだろう。特に周一は真面目な人間に戻ってくれるかもしれない」。この菊子の発話にとりこまれた江口の言葉は二人がお互いを理解しあっていることを如実に物語っている。

こうした出自をもつ菊子がどのような経緯で江口の息子周一と結婚することになったかの説明は映画ではなされない。菊子の江口に対する性的な妄執は棄てられた母照子の憑依ともとれ[11]、ナボコフの「ロリータ」でハンバートが娘ドロレスに近づくためその母シャーロットと結婚したように、周一との結婚は菊子の戦略だったのかも知れない。

かくして横山版の江口は駆け落ちをした若き日の娘を思い起こすこともなければ、血を吐いて死んだ母を孤独に追慕することもない。

---

(11)福田淳子「映画「眠れる美女」二作をめぐって」『川端文学への視界 20』銀の鈴社、2005年 6 月、62 頁

③母の消息を松子に尋ねる菊子

④江口の前に現われる〈眠れる美女〉の菊子

（３）ヴァディム・グロウナ監督『眠れる美女』ドイツ、2006 年

（原題）Das haus der schlafenden schönen　脚本・主演　ヴァディム・グロウナ

波音が聞こえる高い崖のはずれに立つ日本の小さな宿ではなく、旧社会主義国の陰影を残すベルリンの街中の館（メゾン）が物語の舞台なのだが、主人公のモノローグという特徴においては、このドイツ人監督の映画作品がもっとも原作小説に近いのかも知れない。邦画の二作品が江口の家族物語としての現実が前景化されるのに対し、このドイツ映画ではあくまで主人公エドモンドの孤独な観念の世界が暗い空を覆うように飛ぶ烏たちの図像の五度の反復によって作品のドミナント（主要音）となっている。(図像⑤)

江口ならぬ実業家の主人公エドモンドは十五年前に妻モニカと娘キキを自動車事故で亡くして以降、孤独で虚ろな日々を送り続けている。それは事故ではなく、離婚話を進めていた妻の娘を道連れにしての自殺だったと確信し、罪責と後悔の思いに苦しむ彼は大学教授の友人コグマンからある館を紹介される。原作小説と同じようにエドモンドは五夜この館に通い、呼びかけても答えることなく眠る〈経験豊かな娘〉や〈見習いの娘〉、〈情熱的な娘〉の裸体が想起させる過去の体験を独り言つ。〈娘〉の抱擁からは、十歳のとき高熱を出して医者から助かる見込みはないから葬式の準備をするようにと言われた母が泣きながら抱きしめてくれて快復したこと、〈娘〉の陰毛からは、第一次世界大戦後に母が腸チフスにかかり、医療品がないため近所のおばさんから聞いた髪を切って毎日食べればよくなるという話を信じ、自分の髪ばかりでなく陰毛まで食べて病気を治したこと、二人の〈娘〉との同衾からは、十二歳になったワルブルガの聖体拝受の夜に十四歳と九歳の姉妹に挟まれて床についたときの初体験など、母や性にまつわる記憶が浮上する。この映画作品では川端の原作小説を辿るかのように小説内の言葉があちらこちらにちりばめられるだけでなく、死んだように眠ったと言った神戸の人妻との思い出はハンブルグで一夜をともにした女との回想に、花婿候補に犯された末娘の話は街の不良少年たちに犯されそうになって自分に助けを求めた娘キキのコマ送り回想ショットになって描かれる。第五夜の〈娘〉とのキスは棺の中の母に最後のキスをしたことから、事故死して別れのキスができなかった妻と娘への悔恨へと繋がる。

こうした〈眠れる美女〉を媒介とする過去への独白は原作小説と同じなのだが、このドイツ版『眠れる美女』では、老人エドモンドの一人語りを包摂する上位の物語が仕組まれている。そもそも物語はエドモンドの独白ではなく、友人コグマンのボイス・オーバーから始まる。「人生をきちんと生きた者に与えられるのは静かで穏やかな死だ。もう人との

つきあいは必要ない。必要なのは静けさだ。僕らはもういい年だから考えるべきは死のことだ。旅立ちといってもいいが、君には早すぎるかね。」悔恨の毎日を送るエドモンドにコグマンはこう言って〈眠れる美女〉の館を紹介する。そしてエドモンドが頻繁に館を訪れるようになると、館通いはもうやめた方がいいと忠告し、〈眠れる美女〉たちの薬を要求したり、死体の処理方法を尋ねたり、街で遭遇した〈眠れる美女〉を追いかけたり（図像⑥）という館の規則破りをするに至ってはマダムと呼ばれる館の女主にエドモンドを「自由にしてやりたい。万事まかせる。」と言づけ、六回目に館を訪れたエドモンドは〈眠れる美女〉のいないベッドの上でマダムによってもられたのであろう薬によって毒殺される。ラスト・シーンではすべての処理を終えて夜の街を立ち去って行くマダムの後ろ姿に「君は頼りになると思っていたよ。」というコグマンの声が響く。

つまりどこまでいっても死んだ妻や娘からの返答を得ることができずに懊悩し続けるエドモンドに、実は〈眠れる美女〉の館を裏社会ですべる友人のコグマンがプロローグで提案したとおり〈静かな死〉を与える。それが殺害ではなく、救済であることはエドモンドの死体をまえに聖母像となって現われる館の女主の映像が示しているのだろう。原作小説にはない宗教的な救済によって物語は閉じられる。主人公と対話をすることのない〈眠れる美女〉はここでは街角のキオスクで遭遇し、微笑みを浮かべる存在として再び登場し、エドモンドを館での死へと導くきっかけをつくることになる。

⑤空を覆う烏の群れ

⑥ 街中で遭遇した〈眠れる美女〉

（4）ジュリア・リー監督『スリーピング・ビューティー 禁断の悦び』オーストラリア、2011 年 （原題）Sleeping Beauty 脚本 ジュリア・リー 配役 エミリー・ブラウニング

このオーストラリア版『眠れる美女』では〈眠れる美女〉は眠っていない。小柄な女子学生ルーシーが〈眠れる美女〉になるまでの物語ということになるだろうか。四作の中で唯一の女性監督であるが、あるいはゆえに、郊外にある女主クララの邸宅を訪れる三人の老人のうちの二人は、ラグビーのフォワード選手を思わせるがたいで、眠るルーシーの耳に火のついた煙草の先を入れたり、ベッドから抱き上げて床に落としたり、加虐的な振る舞いをする。静的で陰鬱なこの作品を S・キューブリック監督のホラー映画に例えた批評[12]があるが、家族が壊れて住む家も失い、学費と生活費を稼ぐためにいくつものアルバイ

(12) Dan Sallitt *In Defense of Julia Leigh's "Sleeping Beauty"*、17 JAN 2012
https://mubi.com/notebook/posts/in-defense-of-julia-leighs-sleeping-beauty

トを掛け持ちして〈眠れる美女〉の仕事にたどり着くルーシーの姿は、現代の若い女性の貧困をテーマにした社会派ドラマといえるかも知れない。いずれにせよこの作品の主人公は〈眠れる美女〉ルーシーであって、この邸宅を訪れる老人ではない。

さてこの映画の冒頭は奇妙なシーンからはじまる。スクリーンの左に白衣に白手袋の男がなにか実験の準備をしている。スクリーン右上に sleeping beauty という小さなメイン・タイトルが現われ、消えると、その右奥のドアが開いて小柄な若い女が入ってくる。女は男から渡されたバインダーの書類にサインをして、喉に麻酔薬を吹きかけられてから、長い管のついた小さな楕円形の球体を飲み込んでいく。（図像⑦）このあと女はレストランのあと片づけをし、次のシーンではバーのカウンターで売春相手の男性客を待つ。朝家に帰ると、朝食を終えたらしいひと組の男女がおり、そのうちの男が家賃を払えと督促し、浴室の掃除を命じる。浴室のタイルの目地の黒ずみをこすり終えると、自室にもどった女はアイ・マスクをつけて着替えることもなくそのままベッドに倒れ込む。シークエンスのつなぎはフェイド・アウトなのだが、その闇の時間が長く深い。

この映画作品ではいくつもの説明の必要な出来事が放置されたまま物語は進行し、最後までそれらの謎は回収されない。「両親の家」であるにも関わらず、「呑むと暴れるプロの占い師の母」はなぜそこに住んでいないのか、なぜルーシーは「両親の家」から追い出されなければならないのか、ルーシーの唯一の心の慰めであり、物語中四度その部屋を訪ねる恋人のバードマンは何に病み、なぜ死ぬことになったのか、電車内で眠り込む女、送迎車に片手を挙げるヒッチ・ハイクの男はどのような意味をもっているのか、それらは映画内では不明のままである。語られる物語の枠からはみ出したこれらの出来事は、浮世絵の〈空から降る枝〉の構図のように、観客にその解釈は委ねられているということなのだろうか。そういえば、原作へのオマージュか、言及はされないもののあちらこちらに日本文化の表象がウインクをする。それは〈眠れる美女〉の邸宅の廊下やクララの応接室に飾られた黒松の盆栽だったり、屏風図だったり、送迎の車が日本車だったり、ルーシーが聴講する大学の授業で囲碁の棋譜が解説されていたり、 眠り薬が茶筅でとかれたり、といった具合である。

〈眠れる美女〉の邸宅でルーシーの最初の夜に現われた老人（奇怪なディナー・パーティーの主催者）、そして最後にルーシーの傍らで息を引き取る老人も不可解である。この老人は眠るルーシーを前に、立ち去ろうとする女主クララに最近読んだ短編小説の話をし始める。それはオーストリアの女性詩人インゲボルク・バッハマンが書いた最初の散文作品、「三十歳」という〈彼〉を主人公にした抽象的な伝記で、存在の根源的な不安が語られる。「おまえは骨ひとつ折ってはいないのだ。」[13]という結末の言葉を引用し、成功者としてここまで生きてきた自分だが、「私のすべての骨は折れている」「きみの助けが要る」とクララに告白する。（図像⑧）クララは優しい眼差しで「ここは安全よ」「恥などない」「誰もみないわ」「ただし挿入は禁止よ」と言って部屋を出る。この老人の過去の独白にはクララという聞き手がいて、慰めの返答を得られており、〈眠れる美女〉と同じ薬を調

(13)インゲボルク・バッハマン（生野幸吉訳）『三十歳』白水社、1965 年、91 頁

合されて息を引き取ることになるものの、救済のない江口の孤独な独白とは異なるだろう。

⑦被験者のアルバイトをするルーシー

⑧女主クララに告白する老人

さてこのように四つのどの映画作品においても〈眠れる美女〉たちは眠り続けることはなく、その眠らない姿を表わすことによって老人の問いかけに応えることになるのだが、原作小説の主人公江口の声は最後まで誰にも届くことはない。語りかけるという行為、他者とのコミュニケーションが〈眠れる美女〉を相手にするような、実は相互性のないモノローグではないのかという原作小説「眠れる美女」のテーマは、アダプテーションされた映画作品との比較によってより露わになるだろう。[14]

(14) 文中の図像①～⑧は下記からの引用
①② ABC 放送（1981 年 10 月 14 日）
③④ DVD『眠れる美女』（横田博人監督、1995 年）ローランズ・フィルム株式会社
⑤⑥ DVD『眠れる美女』（ヴァディム・グロウナ監督、2005 年）ジェネオンエンタテインメント株式会社
⑦⑧ DVD『スリーピングビューティー』（ジュリア・リー監督、2011 年）クロックワークス株式会社